

Special INTERVIEW

by The Future Soe Yu wai

Super Seven Star Motors Industry Co., Ltd.
Managing Director

ウーサンリン氏
(U San Linn)



All made in Myanmarを 目指して。

現在、ミャンマーでは輸入車販売が主流だが、政府はミャンマー国産自動車の製造を後押ししている。2011年2月、国内自動車製造企業の一つである Super Seven Star Motors Industry 社 マネージングディレクターのウーサンリン氏にお話を伺った。

The Future Soe Yu wai(以下F) : Super Seven Star Motors Industry Co.Ltd(以下 SSS)のモーターは何ですか。

U San Linn氏 : SSSは、グローバルテクノロジーとナショナルバイオニアを目標に掲げ、カスタマーファースト(顧客第一)を基本に、安く安全な新車を生産することをモーターにしています。

F : SSSで現在、生産販売している車種？

U San Linn氏 : 現在生産している車種は、軽トラックの1トン、2トン、2.5トン車で、多様に活用できるMPVは救急車、ピックアップ、普通乗用車の3種類です。年間の製造目標は3万台ですが、現在はまだ1万台あまりです。

F : これから新たな計画はありますか？

U San Linn氏 : 燃費が良く環境にも優しい自動車の生産を計画しています。ハイテクにより確実生産できるような技術者の研修もたびたび行っており、さらに海外研修の準備もしています。また新たな販売システムとして、ローンでの購入、ディーラーネットワークやサブネットワークを活用しての自動車パーツの販売、さらに海外有名企業との共同生産の計画もあります。

F : SSSより購入された自動車には、どのようなサービスがありますか？

U San Linn氏 : ご購入いただいた車のメンテナンスは、必要に応じて24時間の対応、また万一不具合が生じた場合は、直ちにパーツを交換させていただいております。取得税はお客様の負担となりますが、自動車税は弊社が負担しております。

F : SSSで使用するパーツの国内生産率はどのくらいでしょうか、またどのような品質管理をしていますか？

U San Linn氏 : パーツの15%は国内製造していますが、その他のパーツは、製造にハイテク

ロジーや精密機械が必要のため、輸入に頼らざるを得ません。最終的には国の許可が必要となりますが、現在、新たなパーツ製造の研究をしています。また品質管理に関しては、高度な世界基準を満たすため全工程の検査を行い、データをとっています。このような工程後、最新コンピューターでデザイン設計通りの調整を行い、ホイールアライメントをはじめヘッドランプ、サイドスリップ、ギヤ、ブレーキ等基準通りに調整、すべてがスベックと適合するよう再検査、最後に品質管理エンジニアによりアーク検査を行い、それはパスした製品のみ販売となります。

F : 生産技術は国内独自のものですか？

U San Linn氏 : もともと海外で取得した技術がベースになっております。海外へ研修生を送り、国内船が帰国した研修生より幅広く技術を学んでいます。我々にとって世界トップレベルで開発されている自動車技術は、大変貴重なもの、また有力な自動車企業と協議を重ね、ハイテク機械を導入して設置する予定です。塗装作業はコンピューターで行っており、アッセンブリーなどは国内産機械に独自技術で行っています。

F : 国内生産車を利用するお客様に対するメリットは何でしょうか？

U San Linn氏 : 国内生産車のメリットは、リーズナブルな価格です。保証もありますし24時間体制でサービス提供しています。デメリットを挙げるとすれば、まだ車種が少ないことですね。

F : 国内生産車の競争が激しくなってきた現在の状況などのお考えはありますか？

U San Linn氏 : 競争が激しくなれば、価格競争もあり、お客様がより安く自由に選択することが出来ます。今までは、海外中古車ばかりでしたが、今後徐々に国内生産の新車が増えるでしょう。また、自動車パーツ製造業者が増えれば、労働者の増加とともにその技術が幅広く取得され、さまざまな可能性と経済発展が期待できると思います。国内生産車が販売された後、自動車市場はその価格が下落してきました。その一面、自動車購入者が増え、ショールームでの販売競争も激しくなり、お客様のお好みで購入することができるようになってきました。

F : 国内生産で難しい点



は何でしょうか？

U San Linn氏 : ミャンマーの企業は政策に沿って生産しなければなりません。また海外よりパーツを定期的に輸入する必要がありますし、技術者のレベルアップのために海外研修も必要です。

F : 今後のミャンマー自動車市場の展望は？

U San Linn氏 : ミャンマーでの国内生産車をSSSが始めました。弊社の業績をみて、他の民間企業も興味を持ち始めております。競争が激しくなった今、市場も拡大し、お客様が実際に購入できるように、販売台数も上昇しています。将来的には海外企業が逆輸入したり、国内生産車も海外市場へ進出できたらいいですね。

F : 最後に一言。

U San Linn氏 : SSS社は、カスタマーファースト(顧客第一)を基本にリーズナブルな価格で販売しております。政府の後押しと、お客様の率直なご意見で、ここまで発展することができました。より安く生産するためにはコストダウンが必要です。高度な技術者によって大量生産を実現し、国内でのパーツ製造や技術開発を行う必要もあります。TPS(Toyota Production System)方式を取得するために、世界トップレベルの自動車企業へ、技術者の研修派遣する予定もあります。より高度な技術により、スタイリッシュでリーズナブルな価格で国内自動車を提供できるように変わってほしい。

有難うございました。



訪問報告

黒岩 恵 (ESD21会長)・和澤 功 (ESD21理事長)



ミャンマー最初の自動車生産会社と言えるSSS社 (Super Seven Stars Motor Industry Co. Ltd) は2009年設立。昨年11月、政府関係者参加による開所式が行われた生産が始まったばかりのKD (Knock Down) 工場である。部品の全てを中国のFoton社 (小型トラック) と King Long社 (MPV)、溶接機や塗装設備、プレス機など生産技術や設備も全て中国から輸入。従業員: 450名 (エンジニア17人、スタッフ100名)、敷地面積: 16エーカー、生産台数: 最大12000台/年、生産車種: 小型トラック1.5、2.0、2.5トン、MPV、VAN、救急車など5車種、4カラー生産で生産リードタイムは1週間。将来計画に電気自動車、エンジンや自動車部品、生産治具や金型とあるが、具体化するには数年以上かかるであろう。



KD生産は発展途上国による自動車生産の常識で、他のASEAN各国の20数年前を想起させる。税金部品の内製に台湾製の350トン、1500トンプレス各1台を調達、設置したが、プレス部品が安値に購入可能との政策転換で、高価なプレス機も室の持ち腐れである。KD生産につきものの部品の誤欠品が頻発にあるとすることで、6台/時間生産 (日本の乗用車は1台/分) で設計されたライン (ボデー溶接、塗装、組立、検査ライン) も、現在は、1時間4台以下となっている。作業員の作業訓練同様の組立作業を思わせ、いっその事、半分以下の作業員に実際の車の生産をやらせ、後は各工程の作業訓練に徹した方が

が良い、とアドバイス。ちなみに3年前に幹部50名に4日間のワークショップでTPS/リーン方式を指導した重機販売会社Win Strategic Groupは、事実上の社長がToyota Indonesiaのマネージャー6人を雇い、トヨタ方式導入に注力し、今回の訪問視察で後々の3年間の差の素晴らしさに驚かされた。トヨタ式の訓練を受けたマネージャーがいらないSSS社ではあるが、適切な指導者がいれば、親目的で勤勉なミャンマー人の会社が、同国の自動車産業を支える企業となる事が期待できる。まずは、トップ自らのTPS/リーンの気づき、SS、見える化、創意工夫制度など

社内の改善風土の醸成が必要。さらに固有技術・技能のスキルアップから入り、2~3年後から本格的なTPS/リーン方式とIT化による競争力向上というステップ。「先達はあらまほしきものなり」を実感した。(黒岩 記)

SSS社MDと意見交換



黒岩 恵 ESD21会長
トヨタOB 九州大学博士 (電気・制御) 卒。トヨタではTPSのIT化全般に経験豊富。名古屋工大、九州工大等の客員教授やNPO、講演活動。



SSS社の組立ライン

発展しようという熱意と、謙虚に学ぶ姿勢に将来を期待する。



SSS社フーカーにTPS/リーン方式のミニセミナー

いど必死に産業を興した時期を思わせるものである。社長も社員も一丸となって一生懸命取り組んでおり、TPSなど謙虚に学ぶ姿勢には感動した。ESD21もこのような企業に経験豊富な有識者による支援を継続できたら素晴らしい。

③今後に向けて
SSS社は製品の企画設計は行っておらず、部品も内製化していない。この段階での課題は、部品表 (DB) をまず整備し、生産計画 / 在庫 / 運送リードタイムなどと連携状況をSSS社内はもちろん、部品購入先の中国とリアルタイムに情報の共有化を行って必要な部品の的確に確保することである。次いで、長期的課題としては部品の内製化を進めること、さらには製品の企画設計を行えるようになり、真のミャンマー製自動車生産に移行することであろう。その中でTPSの考え方や改善方法を学び、段階的に取り入れ、日々改善を行う会社風土とそれらを支える人づくりが、根幹的な重要事項になるのは論を待たない。(和澤 記)



和澤 功 ESD21理事長

日本ユニシスOB。TPSを支えるITシステムのソリューションの経験豊富。



重機販売会社 Win Strategic GroupにおけるTPS/リーン方式導入3年後の改善報告を受ける



ミャンマーに関するビジネスレポート誌「The Future」出版記念

ESD21 セミナー in YANGON レポート

鈴木明夫 (ESD21顧問)



「The Future」出版の合同事業体である Myanmar Resources Group 及び合同会社プラスディーによる出版記念セミナーに「ESD21」の3名が講師として招かれ、2011年2月4日ミャンマーヤンゴン市の最高級ホテル「セドナ」にて開催され政府関係の来賓を含め民間経営者280名の参加者で会場は満席で大盛況であった。これは、昨年11月の総選挙で「民政移管」され、2015年のASEAN統合を控え、他国より豊富な資源を最大限に活かす方法やチャンスをおこのセミナーで得ようとする熱い視線を強く感じた。



今回のセミナー後の出席者からの多くの質問の背景にミャンマー独自の流動的な雇用慣行や労使関係があるのでそれを考慮したTPS/リーン方式実践の指導をして欲しいとの要望が多かった。会社のトップ、経営者、管理者がリーダーとなり継続的な改善意識を持ち、トップ自らが現場に出て刻々発生する問題に対し具体的な課題を与えフォローする事により従業員の向上心を高め、会社の品質を高め、原価を低減できるので戦場の問題を見つけ、解決できる人材がどれだけいるかが企業の差になる事を強調した。発展めざましいアジアにあって、資源の豊富さでは負けているミャンマーがその資源を最大限に活かす発展するために、異なる分野や業種に共通するTPS/リーン方式の考え方や改善方法を学び、段階的に取り入れ、日々改善を行い会社風土とそれを支える社員づくりをするための研修会・研究会を Myanmar Resources Group プラスディーとの共同開催により次期ステップとして企画したい。

参加者の代表的質問と返答

質問1. TPS/リーン方式は製造業以外にも応用できるか?

返答: TPSの基本的な部分＝問題解決のため

講演内容



- 黒岩 恵/ESD21会長
「TPS(トヨタ生産方式)/リーン方式の基本原則と実践の有効性」
- TPS/リーンの背景、トヨタの経営哲学、TPSとトヨタウェイの原則
- Just-In-Time, 自動化、ムダの排除、実現のツール、改善成果
- 情報通信技術によるTPS/リーンの進化



- 和澤 功/ESD21理事長
「企業・ビジネスを成功に導くTPSを支えるITシステム」
- 成功するTPSを支えるITシステム開発、IT基盤システム
- ITソリューションシステム及び中国進出日本企業の事例

- 鈴木明夫/ESD21顧問・理事
「Myanmar Resources Group及び合同会社プラスディーとの協働によるTPS/リーン方式導入のための事業展開」
- オープンセミナー開催
- マルチクライアント研修会・研究会
- 個別コンサルティング含む個別商取引への対応

の考え方は、どの業種、どの現場にも当てはまり、問題が起きたら、その問題がなぜ起きたのか掘り下げる事が重要。表面に見えている現象について対処しても、本質が見えなければ同じことが再度発生する。本当の原因(＝真因)は何かを、しっかり捉える事が必要。TPSと言っても、テクニック論ではなくあるべき姿を追求し続ける考え方で、原点はムダの排除による原価低減でありムダを省くという考え方は、どの会社でも共通として役立つてもらいたい。

質問2. TPS/リーン方式の中で5S(整理・整頓・清掃・清潔・検)の重要性について個々の違いを含め、今一度説明して欲しい。

返答: TPSは5Sを実践できれば改善活動の50%以上は達成できたも同然。
整理: 「いるものとらないものとに区分して、いらぬものを処分する」
整頓: 「いるものを所定の置き場にきちんと置き示す」
清掃: 「きれいに作業員自身が掃除する」
清潔: 「いつ誰が見ても、誰が使っても、不快感を与えないようにきれいにする」
検: 「職場のルールや規律を守る」
5Sは全ての管理の基本であり、5Sの徹底で経営革新が実現でき会社も儲かる。



鈴木 明夫 ESD21理事・顧問

豊田通商OB
欧・米・中でのビジネス経験豊富。

COLUMN

ミャンマー雑感

新潟県糸魚川市在住 N.I.氏

2年ほど前に仕事の関係でミャンマーに1週間ほど滞在したことがある。その時のミャンマーでの印象を以下に記す。

まず入国時の空港での入国審査を実施する女性の明るさにビックリ。微笑みながらベチャクチャ話そうに何やら話しながら入国手続きをしてくれた。日本のテレビを見て思っていたイメージが一変。東南アジアのどの空港にもこの明るさは無い……！
いったいどんな国なのだろう、と興味を覚えた。

滞在中、現地の大学卒業間もない日本語を勉強している学生に色々とお手伝いをしてもらったが、非常に真面目で勤勉でかつ相手を思いやる心・気配りが素晴らしい。日本人が忘れてしまったような思いやりや心にあふれ、日本の若者も見習って欲しいと感じた。また、国のどこにも金色に輝くバゴタがそびえ立ち参拝者も多く、仏教信仰が厚く道徳心が世の中にしみわたっている深い印象を受けた。また街中を歩く若者の目の色が日本の若者と全く違う。眼に力があり自分の将来に対する希望と夢にあふれているように思えた。一方、街中を走る車・バスの多くは、日本の中古をずーっとも、30年も40年も使っているような感じである。よくまあここまで使い切ったものだと感じると共に、日本の車ってすごいな！と感じた(他国の車はここまでもたないらしい)。一方で「天然ガス車」が普通に走っていて、日本から見ると最先端!? 中心街では、西洋と洋が入り混じったような不思議なレトロ風の町並み。ちょっと場違いかなと思うような西洋レストラン、マーケットの雑多な賑わいと活気。不思議だが心がなごむ。

人口約6,000万人。若く勤勉な人々。親日家が多い国。ベンガル湾に面した地政学的に重要な立地条件。資源面では内陸の金銀資源、海岸・海洋部の石油・天然ガス。農業面では前近代的な農業及び広大な未開発の原野。ここにはまだ手付かずの大きな宝が眠っている。まだ社会的なインフラ(道路、港湾、電力、上下水道、通信等)は未整備な状態であるが、経済制裁が解かれ、民主的な法整備をはじめ経済・社会のルール改革が実施され、諸外国が投資しやすいビジネス環境を整備されれば、遠からず経済発展する可能性を秘めている国。

魅惑的な雰囲気。将来に限りない希望をいだかせる国。この国の未来を見たと思うのは私だけではないと思う。

世界を見据えてミャンマーで活躍する日本IT企業

Myanmar DCR

ESD21の黒岩氏をはじめ和澤氏、鈴木氏が、2008年にMyanmar(Yangon)で設立されたIT分野における唯一の日系100%資本会社 Myanmar DCR Co.,Ltd を訪問。有言実行をスローガンとしてミャンマーと日本の架け橋になるべく日々活動し、日本及びグローバルマーケットに対して、様々なITサービスを提供している同社マネージング・ダイレクター・小笠原亨(おがさわら へん)氏にお話を伺った。

基本姿勢は「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」

「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」を基本姿勢として Myanmar DCR の社員に対してまず最初にその理解を求めさせました。少子高齢化の現在の日本の状況下で、ITや日本語の能力が高いミャンマーの若者達が日本のIT業界とともに仕事をする事で近い将来に素晴らしい Brand Image を作ってくれることを期待しています。私はDCR Co.,Ltdの海外推進室の責任者として主に中国やASEANと言った色々な国々を視察した結果、ミャンマーに初めて触れる機会が2006年本にありました。ミャンマー人は日本人と非常に似ている所があり、まず相

手のことを考えてくれる習慣があります。ですから、日本のお客様の成功の事を考えてミャンマー人も日本人のように貢献できると思います。Digital Divideの問題でミャンマーの若者達は技術についての知識がまだ不十分なこともよく理解していますので、会社で採用した新人社員のため様々な研修を用意・実行しております。また、IT及び日本語に才能がある社員達を日本に派遣する予定もあり、一部を2008年5月に実際に派遣致しました。絶えず技術の先進性を追求し、社員は夢と誇りを持ち、日本とミャンマー双方社会のため貢献する企業を目指します。

MDCRの業務内容

- システムインテグレーションサービス
- ITコンサルティングサービス
- 投資、分析と計画支援サービス
- 開発、保守とインストールサービス
- グローバルデリバリーサービス (オフショア)
- グローバルスタッフ紹介サービス
- BTOサービス

アプリケーション・ソフトウェア開発

ビジネス業務ソフトウェア
技術ソフトウェア・オープンシステム開発

人材派遣サービス

IT/日本語(原則日本語検定試験2級以上)の skillの高い社員の日本への派遣

ネットワークサービス

- ネットワーク設計・管理
- LAN/WAN構築・保守
- ヘルプデスク

WEB制作(保守)

- Webサイト構築とインターネット・イントラネット
- アプリケーション開発
- Webホスティングとポータル開発・保守
- コマース・ソリューション



左手前より小笠原氏、小林氏、右、手前より鈴木氏、黒岩氏、和澤氏。

Myanmar DCR Co.,Ltd
住所: Room-408(8), 4th Floor, Yuzana Tower, No.69, Shwe Gone Daing Road, Bahan Township, Yangon, Myanmar
TEL: 95-1-558229 FAX: 95-1-558229
設立: 2008年7月14日
資本金: 56,000US\$(100%日系資本)

●関連会社(出資元)
株式会社 第一コンピュータサービス
所在地: 〒460-0003名古屋市中区1丁目16番20号
グリーンビル
TEL: (052)204-1411(代表)
資本金: 資本金2億7,900万円(払込済)

Visiting to Myanmar DCR

人材育成への取り組み

研修は入社前からは始まり、IT技術・日本語等の研修カリキュラムを体系的に整え、個人の能力を最大限に引き出します。そして、個人の目標とするキャリアパスの実現を行います。

■教育制度

日本語とIT技術のスキルを向上するため、教育委員会が研修の計画と実施をリードしています。社内図書館を設け、日本語やIT知識の支援も行っていきます。

教育委員会の主な目的
新入社員へ基本的な技術(ビジネスマナー、IT基礎知識など)を教育する
社員のスキルアップの為に研修を計画・実施する
社員のキャリアパスを実現する為、研修を計画・実施する

■IT研修

新入社員のプロダム基礎研修として現地パートナーであるKMD Training CenterやWinner Training Centerで研修を行います。プログラム基礎研修後は、開発技術研修としてOJTを実施しています。また、社員一人一人が将来の目標を設定し、目標を達成する為に教育を実施しています。

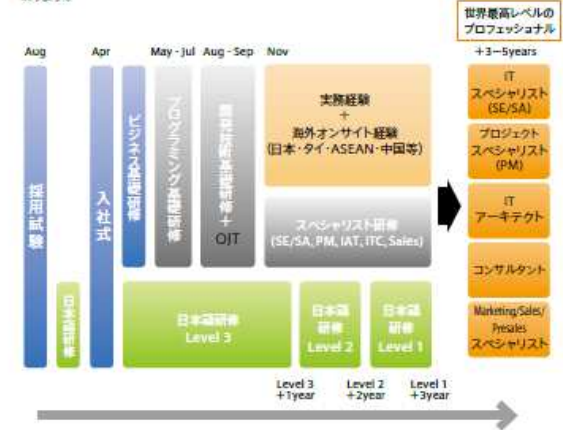
■日本語研修

日本語については現地パートナーのWin Japanese Schoolや Momiji Japanese school で日本語研修を行います。社員の日本語能力の達成度を測るために社員全員日本語能力試験を受けております。

日本語能力試験合格した社員数

日本語能力試験	1級	7名
	2級	52名
	3級	69名
	4級	5名

※ 試験実施年: 07.75(2010)08(2011) 本人志願者



General Manager
Mr. Masahiko Kobayashi
「一般的なオフショア開発において、異なる言語・習慣・文化の違いによるネガティブなイメージを払拭し、日本基準のクオリティを安定供給すべく我々日本人スタッフが奮闘し、日々開発高揚にあたりております。朝礼、ミーティング・メール・各種報告文書等、すべて社内は日本語です。現在家族4人でお年中、とても通じやすく安全で快適な国ですよ!」



Manager
Mr. Satoshi Niimi
「お客様に対して常にベストなサービスを提供できるよう、社員一人一人が目標を掲げ、技術の向上に励んでおります。我々日本人スタッフがそれをリードし、社員共々日々成長しています。ミャンマーへ赴任する前は、正直あまり良いイメージはなかったのですが実際に住んでみると、ミャンマー人の人柄の良さや治安の良さなどとても良い国だと感じております。」



Manager
Mr. Kyaw Min Oo
「Myanmar DCRではシステム開発を計画、設計フェーズからプログラミング、テスト、運用保守までちゃんとしたプロセスとメソッドロジーを利用して実施しております。国際的な会社で働きたい、ソフトウェア開発に関心している者達にとって十分いいチャンスを与えられるミャンマーにある唯一の日系会社だと思います。」



Manager
Ms. Kaung Myat Tun
「お客様の心と考えを大切に、価値のあるサービスをご提供できる会社であり、社員の皆さんも毎日の仕事を楽しくしてまいります。ミャンマーの若者達がグローバルな視野で成功を目指し、各々の夢を実現するチャンスを得る事が出来る会社です。」



Manager
Ms. Myo Zar Phyu Win
「IT企業での経験豊富な日本人マネージャの下で、品質・コスト・納期を常に意識して開発を行っています。ミャンマーの若者達がグローバルな視野で成功を目指し、各々の夢を実現するチャンスを得る事が出来る会社です。」

Travelling in Myanmar [SPECIAL EDITION]



【Chin Village】

ミャンマーとインドの国境近くにあるチン州の主要民族がチン族。地形が険しいため方言の分化が著しく同じミャンマー人同士でも現地の通訳が必要なほど。ここチン州は、10年前まで外国人の立ち入りが禁止されていた区域。チン族の女性には今でも顔にタトゥーを施す風習が残っている。これは、かつて王様がチン族の美しい村娘を見初め、連れ帰ろうとしたが、その跡を逃れるため顔に墨を入れ顔くしたという話から由来として伝わっている。



【Bagan&Mandalay】

カンボジアのアンコールワット、インドネシアのボロブドゥールとともに世界三大仏教遺跡のひとつといわれているバガン。ここに現存するほとんどのバゴダや寺院は11世紀〜13世紀に建立され、後に地震によって倒壊。現在のバガンの景観を作った。地平線まで見渡せる広大な大地に2000基あまりのバゴダ・寺院が点在するさまは圧巻。マンダレーは、イギリスに占領されるまで王朝が置かれていたミャンマー王朝最後の古都。壮大な建築物が残る。



【Ngapali】

ミャンマービーチリゾートとしての第一候補地。素朴な味わいを残すこのビーチでは空を映す澄みきった青い海を堪能できる。周辺をサイクリングしたり、島へ渡ったり、自分なりの過ごし方でビーチを満喫してみよう。

【Mt.Popa】

ポパ山は標高1518mの死火山。その頂上には城塞のような寺院が建つ。国立公園に指定されているここポパ山は、一年を通してさわやかな気候で、珍しい花々など植物はもちろんのこと鳥や蝶類などの観察も楽しめる。また、乗馬やガイド付きポパ山トレッキングなど楽しいさわやかな空気の中でアクティブにも、んびり過ごすのも思いのまま。



【Phakan】

ミャンマーは高品質の宝石が産出される国として有名であるが、特にルビーと翡翠は、そのクオリティに対する評価が高い。世界最大の翡翠鉱脈があるのがカンという町。ミャンマー北部に位置するこの町は、厳重な国の管理下にあり、外国人が訪れるには国の許可が必要だ。ヤンゴンから1日かかりの旅程も、翡翠の美しい輝きを見るためなら価値のあることだろう。



【Akha Village】

ミャンマーにはビルマ、シャン、カレン、モン、カチン、チン族の6大民族の他、独自の州を持たない少数民族が10数族存在する。彼らは5カ国の国境を隔した山岳地帯に主に住んでいる。アカ族は中国・ラオスとの国境近くに居住する民族。その美しい民族衣装は必見。



【Golf】

ヤンゴン市内/ヤンゴンの中心からわずか8マイルは慣れた、650エーカーの広さを持つ自然が美しいコース。敷地内には2つの川が流れる。ティーオフはゲーリー・ブレイヤーのデザインによるもの。チャンピオンシップ用のコースがあるのはヤンゴンではここだけ。極めて美しいコースである。
○18ホールチャンピオンシップコース
○7019ヤード/パー72
○フェアウェイ・グリーンとも
Seashore Paspalum芝



バガン/バガンユニオンゴルフクラブは1996年の開設。数百年前のバゴダに囲まれたゴルフコースは世界に類をみない光景である。パー3の13番ホールは特に有名で、グリーンから見る素晴らしいパノラマ風景はプレーヤーのみ許された特権。1998年、JAPGA (The Asian Professional Golfers Association) LONDON MYANMAR オープンが開催された。良く手入れのされた美しい芝で、世界各地でプレーをするゴルファーのアジアでの常コースとなっている。

ミャンマーの楽しみ方、あれこれ。

ミャンマーは、とても自然を大切にする国。まだまだインフラが整備されていないということもあるが、そのこと「自然を大切に」ということは別物だ。便利なことには慣れず自然を大切にすることはイライラすることも多々あるだろう。しかしそれを補ってあまりある美しさがミャンマーにはある。ハワイやゴールドコーストのようなビーチリゾートはないけれど、地元の人々がそこで生活を営んでいるという空気、粉れもない美しい海、珍しい自然生態系が残る山、金色に輝くバゴダや古いバゴダ群、マンダレーの王室、イギリス植民地時代の建造物まで、複雑な歴史と固有の文化を物語る証が点在して飽きさせない。山岳地方は、少数民族の宝庫。顔にタトゥーを入れたり、首をリングで長くする風習のある民族、かつては首狩り族だったような武勇を誇る人々から水上で生活する民族など多様な人々の生活を垣間見ることができる。文明にさらされていない、独特の文化を守り続ける人々との交流は素晴らしい体験となるだろう。ヤンゴンのような都市部では、世界の都市と同じように、各地から人々が集まってくるため、固有の民族色は薄れているが、その宗教心に裏打ちされた温厚で心優しい人々がいる。ミャンマーは「自然」から「人」まで、旅人にとって興味の尽きない国であることは間違いのないだろう。

【Inle Lake】

シャン高原の標高1328mあたりにある南北に長い形をしたインレイ湖は、東西が山々に挟まれた夏でも比較的涼しい、風光明媚な美しい湖。この湖は水深が浅く、数多くの浮き島が形成され、そこに村や畑などをつくるインダー族といわれる水上生活民族が居住する。彼らはカヌーを独特の漕法で操る漁師である。湖畔巡りやトレッキング、また湖上をエンジン付きのボートで水上村や寺院、水上マーケットでまわることもできる。水上の涼しい風の中、彼らに合わせたゆったりとした時間を過ごすのもまた格別。



MAI ミャンマー旅行・ご用命はミャンマー航空へ
http://www.mai.or.jp/